

発達支援研究所ホームページ <https://smart-kids.co.jp/lab/>



スマートキッズプラス大島

「ひとつのおもちゃ箱から、色々なおもちゃがでてくる。」そんなコンセプトをもとに作成しました。子どもたちひとりひとりのアイデアを、シールや色ペンを使って形にしていきました。

「発達障害の子どもたちへ 心に届く読み聞かせ絵本ガイド」

学校図書館活用支援研究室主宰 河本利廣

1 はじめに

私は子どもの読書活動に長く関わってきました。読み聞かせの本の紹介には自信があり、魅力的な本を紹介できていると思っています。今回、発達障害のある子どもたちの読み聞かせに適した本を紹介するのは、はじめての試みです。子どもたちにどのようにして受け止められるかは未知数ですが、保護者や教育・支援に関わる皆様に実践していただき、その反応を共有していただき、教えていただければ幸いです。

2 読書が子どもの成長に果たす役割

読書は文字を読んで、その世界を想像し、登場人物の表情や息遣い、周りの景色をイメージし、作品の世界に自分が入り込んで、物語の展開を楽しむことです。そうした中で自分とは違った生き方や人生に出会い、自分ならどうするかを考えたりします。多くの本を読み、多様な生き方を知り、自分の存在を深く考えるようになります。疑問に思ったことを調べて、解決しようとする積極的な生き方につながります。教育基本法の第1条にあるように未来の社会の担い手になると考えます。

3 読み聞かせは、子どもを本好きにする

読み聞かせは、多くの子どもを本好きにできる大切な仕事です。読み聞かせによって、文字に苦手意識のある子どもも、イメージを膨らませ、主人公や登場人物の行動を楽しむことができるようになります。そして、物語の面白さに夢中になるきっかけを作ります。また、読み聞かせする大人と、聞いている子どもに温かい人間的な絆ができます。まず、読み聞かせする大人がその本を好きになるかどうかは鍵です。心を込めてあなたが楽しく、分かりやすく読めばいいのです。あなたの自然なやさしい読み聞かせが大切です。

4 発達障害のある子どもへの読み聞かせに適した本の紹介

発達障害の子どもたちは、一人ひとり違う感性と得意、不得意を持っています。それぞれの子どものもつ豊かな個性に寄り添いながら、本との出会いを大切にしたいと思います。この章では以下の傾向がみられる子どもたちにお勧めしたい本を紹介します。分類は便宜的なものであり、どの子どもにも共通するのは、心を動かされるような本に出会った時の喜びです。



(1) 自閉スペクトラム症(ASD)の傾向がある子ども向けの本の紹介

ことばの意味を文字通り受け取ったり、強いこだわりや関心の集中が見られたりすることがあります。豊かな感性や集中力があり、素晴らしい特徴をもっていることも多くあります。物語が明確で、先が予想できる作品が効果的です。

グリム童話『ねむりひめ』(フェリックス・ホフマン絵 せたていじ訳 福音館書店)

水浴びをしているおきさきにカエルが予言します。「むすめが生まれますぞ」王様は生まれた姫のために大宴会をします。国には占い女が13人いましたが、金の皿が12枚しかなく、一人をはずしました。恨んだ13人目の占い女は「姫は15になったら、つむにさされて、死ぬぞ」とののしりました。12番目の女が「姫は死にません。100年の間ねむってしまわれます」と言いました。15になった姫は城を探索、小屋で老婆が糸をつむいでいます。姫が「つむ」をさわると眠ってしまいます。圧巻なのは城のすべてのものが眠りにつくところです。城は茨に包まれ見えなくなります。百年がたち、一人の王子がやってきます。城に入ろうとすると茨がカーテンのように開き、城に入ります。眠っている姫があまりに美しくキスをしました。すると姫が目覚め城もすべてが目覚めます。盛大な結婚式をあげ、いつまでも幸せに暮らしました

『はちかつぎひめ』(長谷川摂子 中井智子絵 福音館)

夫婦は子どもがほしいと観音さまに祈りました。生まれる子どもに鉢をかぶせて、決して取るなとお告げがありました。鉢を取らないよう育てました。13の時に母が死に、継母がやってきました。娘を嫌い、召し使いに、娘を遠くに捨てに行くよう命じました。夜、野原に捨てられた娘は川に落ちました、鉢があるのでおぼれず、漁師に助けられます。継母が聞きつけて「あれは鬼の子だ」と漁師を脅します。川に捨てようとした時、殿様が来て娘を自分の家に引き取りました。家には4人の息子がいました。末の息子は台所で働く娘が美しく賢いことに気づき、好きになりました。父親に話すと、明日、嫁くらべをするからと言われました。娘は醜い鉢をかぶった自分を卑下し、家を出て行くと言いました。二人で家を出ようとしたら、鉢が割れ、たくさんの宝物や美しい着物が出てきました、当日、美しい娘を見て父は結婚を許し、二人は幸せに暮らしました。

『つきにでかけたおんなのこ』(ジュラル・フランカン ほりえとしゆき訳 フレーベル館)

ぼんやりしているのが好きな女の子がいました。でも、父も母も姉も弟もぼんやりしているのは月に行っているようだと言いました。女の子は迷いましたが、月に行くことにしました。満月の日に、梯子で月に行ってしまいました。月は寝心地がよく、月の住人と仲良くなりました。家族みんなが元気がなく、女の子のことを心配していました。満月の夜、女の子は、はしごで家に帰りました。それからもぼんやりするのを楽しみました。

『いつもちこくのおとこのこージョン・ノーマン・パトリック・マクヘネシー』(ジョン・バーニンガム あかね書房)

ジョンは勉強しに学校に行きますが、マンホールからワニがあらわれ邪魔をします。次の日、ライオンが出てきて、木にのぼって避けます。次の日も突然、高潮に襲われ遅刻します。先生はジョンの苦難を全然聞かず、毎回嫌な罰を与えます。ある日、スムーズに学校につくと、先生が大きなゴリラに捕まっています。助けるように言われますが「町にゴリラなんていません」と言って他のところへ勉強に行きます。

『すみれちゃん』(石井睦美 黒井健絵 偕成社)シリーズになっています

すみれちゃんは、本当はフローレンスという名前が良いと思いました。お父さんは言いました。4月に生まれた赤ちゃんはとてもかわいく、植物図鑑を真剣に調べ、天使のようなかわいい花、すみれという名前を付けたのだと。すみれちゃんは植物図鑑を見て納得しました。すみれちゃんを大切に作る家族と、すみれちゃんの気持ちをよく捉えた本です。シリーズになっています。

『すみれとあり』(矢間芳子 福音館)

すみれは、石垣などの隙間などに咲いています。すみれの種が飛び散るとき、ありのすきな白いものと種がくっついていきます。甘い白いものをアリは巣に運びますが、種はいらぬから途中でおいでいく。だから種は石垣のところで芽を出し、花をさかせるのです。

『どうぶつえんのおいしゃさん』(隆矢洋子 福音館)

毎日、朝、動物園を車で見まわります。ライオンがけんかをしてけがをしています。麻酔銃で眠らせ、手術をします。しまうまは、動物園では足の爪を切つてやらないと歩けなくなります。わにが、歯槽膿漏を罹って餌を食べなくなりました。暴れるわにを箱に入れ、動かないようにして歯を治します。

『ゾウの森とポテトチップス』(横塚眞巳人 そうえん社)

ボルネオ島では熱帯雨林が大量に伐採され、アブラヤシのプランテーションが果てしなく広がっています。アブラヤシからはパーム油という食品が取れます。パーム油はスナック菓子やポテトチップスなどを揚げ油に使われています。アブラヤシのプランテーションでは野生の動物の食べ物がありません。川の近くの狭いジャングルでゾウやオラウタンなどは暮らしています。私たちの豊かな生活はジャングルで暮らす野生の動物たちを犠牲にしています。

(2) 注意欠如多動症(ADHD)の傾向がある子ども向けの本の紹介

集中力の維持が難しいことがあったり、衝動的な行動をすることがあります。誰もまねができないような素晴らしい発想をすることがあります。子どもにいろいろと問いかけ、感想をきいたりしながら読み聞かせするといいですね。

『となりのせきのますだくん』(武田美穂 ポプラ社)

ますだくんは、机に線を引いて、「ここからでたらぶつぞ」とにらみます。給食のシチューでニンジンを残すと「いけないんだ」といいます。ますだくんが、ピンクの鉛筆を折った。わたしは、消しゴムをなげた。鉛筆をなおしたますだくんがごめんねと言った。ふたりは仲直りできるかな？

『セーターになりたかった毛糸玉』(津田直美 ブロンズ新社)

おばあさんは毛糸でセーターを作りました。完成したけれど一個が取り残されました。おばあさんは子どもの手袋をその一個で作りました。ところがその手袋をベンチに置き忘れてしまったのです。犬がやってきて咥え、家に持って帰ろうとしましたが、骨に心を奪われごみ捨て場に手袋を置いていきました。猫がやってきてそれを拾って帰りました。そして、ちびのためにセーターをつくったのです。

『はじめてのキャンプ』(林明子 福音館)

大きい子はあしたキャンプに行くのです。なほちゃんは、「わたしもいく！」と言いました。「荷物を持って歩けない」「すぐ泣く」「ごはんをたく薪を集められない」「夜暗いとこわがる」と言われました。でも、行けることになりました。たくさんの荷物をもって歩き始めました。みんなより遅れたけれどがんばりました。みんなはテントを張っています。ご飯を炊く薪を見つける仕事で、なほちゃんは、大きな枝を引っ張ってきました。カレーとスイカをたべました。焚火をし、花火をあげ、おばさんが怖い話をしてみんな寝ました。よる、おしっこに行きたくなりました。ひとりで外に出ておしっこしました。朝、起きるとみんなが朝食を作っていました、顔を洗って「私、ちゃんとキャンプできた」と言いました。

『地下鉄のできるまで』(加古里子 福音館)

地下鉄について、詳しくわかりやすく書いています。加古里子の科学絵本は、子どもの好奇心を満足させる力があります。かいさくこうほうは大きな道路を掘ってつくります。もうひとつはシールドこうほうと言います。シールド掘削機で地下を掘っていきます。

(3) 限局性学習症(SLD)の傾向がある子ども向けの本の紹介

知的発達に遅れはないにもかかわらず、特定の学習に困難があります。文字を書くこと、読むこと、計算など、ある部分に困難なことがあります。しかし、視覚的な理解や想像力に優れた子どもが多く、絵や音、体験から学ぶ力を持っています。絵や写真を中心に描かれた本を読み聞かせするといいいでしょう。

『ねえ、どれが いい？』(ジョン・バーニンバム まつかわまゆみ訳 評論社)

きみんちのまわりがかわるとしたら、こうずいとおおゆきとジャングル ねえ、どれがいい？ ジャムまみれとみずびたしと、いぬにひかれて泥だらけと、ねえ、どれがいい？ このような質問と絵が続きます。だれもが大喜びします。

『江ノ電にのって ごとごととんとん』(金子章文 川内松男写真)

藤沢から鎌倉までの江ノ電の写真が素晴らしいです。お父さんが運転手でこどもが職場を訪問する本です。湘南の海岸を走り、一般の道を走る江ノ電は身近で素敵です。

『かいじゅうたちのいるところ』(モーリス・センダック じんぐうてるお訳 富山房)

マックスはへやで大あばれします。しんしつに閉じ込められます。すると寝室がジャングルになり船でかいじゅうたちのいるところにつき、自分が王になり、かいじゅうたちと踊りました。やがて、なんだか寂しくなり、家に帰ると夕食がおいである。絵が全てを説明する素晴らしい冒険の物語です。

『でんしゃにのったよ』(岡本雄司 福音館)

ぼくはおかあさんといろんなでんしゃにのって、いとこのしんちゃんの家に行く。田舎のローカル電車、大きな町の電車に乗り換える。途中にいろいろな景色が見える。新幹線に乗り換え、すごいスピードで駅に着く。電車の好きなこどもにはぴったりの本です。

5 おわりに

紹介した本はどれも私が大好きな本です。子どもたちがどのように関心をもつか楽しみです。保護者や教育・支援の皆様は読み聞かせした時の子どもの反応を共有し、私にも教えてください。また、紹介したいと思う本がありましたらお知らせください。小学校高学年、中学生の本の紹介は、次の機会に行います。



<プロフィール>

河本 利廣 学校図書館活用支援研究室主宰

香川大学卒業後、東京都の小学校教員に赴任。読書活動を学級経営の柱とし、地域で親子読書会を続けながら、月に一度、子どもと保護者などが一堂に会し1冊の本について話し合いました。都内公立小学校、三校で校長を務めた後、学校図書館活用支援研究室を設立し、主宰として活動を行っています。また、児童文学の評論を行うとともに、「東京都小学校図書館研究会長」として、図書館の在り方やさまざまな読書の重要性とその方法を提案してきました。